

幼稚園・保育所選択要因の検討

A Study on the Factors of the Selection of Kindergarten and Nursery School

上野 礼子*
Reiko Ueno

I. 研究目的 (はじめに)

子どもは3歳までは家庭で母親が育てることが最も望ましいという考えがある。この考えはかなり広く、また伝統的ともいえる使われ方をしている。その一つの根拠として平井は乳幼児期は特に母親との関係が子どもの情緒を安定させ、母子関係の緊密化をはかる家庭保育が望ましく、そして3歳以降の友達関係が発展する時期から集団保育が望ましいと主張している⁽¹⁾。

一方、母親の就労や、家庭で育児が十分に出来ず、早期から母親に代わる保育者による保育の要請も大きい。女性の社会進出にともない3歳未満児の保育所入所者は年々増加の傾向にある⁽²⁾⁽³⁾。しかし、子どもが幼いうちは就労を一時中断して、育児から手が離れる頃に再就職を考えている女性も多い。総理府の昭和57年の調査によれば15歳以上の女子有業率は49%にものぼる。しかしそのうち配偶者をもつ女性の有業率は20歳台後半から下がり、30歳台後半から40歳台前半に有業率が高くなるという。このことはちょうど育児から手の離れる頃に母親が再就職する傾向が多いことが示される。杉山はこの間の母親が職業よりも家庭を選ぶ背景を①“子育て”のある部分を他人に代行させる

ことに罪の意識をもっている、②働きながらする育児の困難さ、のふたつの理由に分析している⁽⁴⁾。3歳までは家庭でという家庭外保育に対する否定的な見方が優勢であれば、杉山の指摘する②の問題に対する社会的な解決は難しいであろう。働く意志を持ちながら子育てのある期間就業を中断することは、女性の社会的な地位に様々な影響を与えることはいうまでもない。

3歳未満児の子どもは母親が育てることが望ましいという考えは、集団保育に対する保護者の意識^{前掲}⁽²⁾、保育者等にもみられる⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾。

しかし近年の乳幼児研究は乳幼児の有能さを示唆する研究が様々に報告されている。これまで主に分析されていた母子の相互作用から、多様な社会的システム間の相互関連的な発達過程が検討されるようになってきている。その結果子ども同士の関係、仲間関係と他の社会システムとの相互関係が注目されている⁽⁸⁾。そして乳幼児にとっても同年齢の子どもとの接触の意味の積極的評価や⁽⁹⁾、同年齢の子どもとの集団生活のもつ意味も重要視されてきている⁽¹⁰⁾。

昨今の乳幼児を取り巻く環境は、核家族化、少子化、働く母親の増加等、益々早期からの望ましい集団保育が要請される。本報告は3歳までは家庭で母親が育てることが望ましいという

*生活科

考え方を中心に、幼稚園・保育所選択要因の検討を行う。検討内容として、その選択に大きく関わる母親の就労に対する志向性、子どもの入園時期の選択、幼稚園・保育所の保育に対する認識の差異について、アンケートによる調査結果を基に報告する。

II. 研究方法

1. 調査の方法と対象

「幼稚園・保育所に関するアンケート」として質問紙による調査を実施した。

調査対象は学生、幼稚園・保育所父母とし、1987年6月から8月に実施した。学生群は各在籍校で実施し、所要時間は20分から30分であった。園児父母群は質問紙の配布を各園に依頼し、父母が記入後封をして園に提出してもらった。

学生は保育者養成課程に在籍する短大生(3校)の保育者志望学生518名、文科系学部に在籍する一般大学生(3校)374名から回答を得、さらに各200名、計400名を無作為抽出した。

園児の父母については都内および近県の幼稚園(公立3園、私立8園)と保育所(公立3園、私立7園)の5歳児クラスに在籍する幼児の父母に依頼した。質問紙は幼稚園群では730部回収され(回収率71.9%)、保育所群では159部回収された(回収率70.7%)。さらに記入もれ等を除いた有効回答は幼稚園群535部、保育所群118部である。さらに有効回答の中から幼稚園・保育所に入園した理由として選択された回答をもとに、以下の群別に分類、分析の対象とした。

A群：(幼稚園・保育所に入園するときの理由として)子どもは3歳までは家庭で育てるべきであるという考えを持ち、子どもが3歳以降入園している(学生群は将来のわが子に対する入園希望)

B群：(幼稚園・保育所に入園するときの理由として)子どもは3歳までは家庭で育てるべきであるという考えを持たず、共働きや

育児を十分に出来ないため子どもが3歳未満で入園している(学生群はA群同様将来のわが子に対する入園希望)

父母、学生別にA、B群を分ける。その結果、内訳は以下のとおりである。

父母A群：幼稚園父母140名、保育所父母3名

父母B群：保育所父母のみ84名

学生A群：保育学生88名、一般学生24名(内男子13名)

学生B群：保育学生10名、一般学生2名(内男子1名)

2. 質問項目

①母親の就労希望：幼稚園、保育所を選択するときの大きな要因と考えられる母親の就労希望についてである。学生群については将来自身の希望とした。

②子どもの入園時期：幼稚園・保育所の入園時期を問う(学生群は希望として)。

③保育のねらい：幼稚園・保育所の保育内容についてどのように捉えているかを問うもので、16項目からなる。設問は「幼稚園・保育所の保育内容のねらいの中でそれぞれが重点をおいていると思われるもの全てに○印をつけて下さい」である。各ねらいは図1に示したとおりであり、幼稚園に重点をおくねらいか、保育所に重点をおくねらいか、幼稚園にも保育所にも重点がおかれるねらいか、どちらのねらいともされていないかが、○の付け方により示される。

3. 結果の分析方法

結果の統計的な検討はカイ自乗検定(両側検定)による。

III. 結果と考察

1. 母親の就労希望(表1)

ここでは幼稚園・保育所を選択する際に大きな影響を持つとみられる母親の就労に対する希

表1 母親の就労希望 (%)

項目	群		学 生	
	A	B	A	B
1. ずっと働く	4.9	68.0	8.9	75.0
2. 女性は仕事につかない	4.9	0	0.9	0
3. 一時働くが再就職しない	1.4	4.7	21.4	0
4. 働いてやめて、子どもがある年齢に達した時点で再就職する	22.4	2.4	52.7	16.7
5. 相手に任せる	16.1	9.5	4.5	0
6. わからない	35.7	4.5	11.6	8.3
7. その他・回答なし	14.6	5.9	0	0

望を問う。

(1) 父母群

子どもが3歳までは家庭で育てるべきと考えるA群では母親の永続的な就労希望は4.9%と少ない。将来就労するかどうかわからないという不明が最も多く(35.7%)、現在はやめているが再就職を望む(22.4%)、夫あるいは妻の意向に任せる(16.1%)という項目が続く。子どもの成長を待って就労するというより、そのときの状況に依存した意向とみられる。

共働きや育児が十分に出来ないため、3歳以前に子どもを入園させている父母B群では、母親はずっと働くという永続的な就労の希望が最も多い(68.0%)。夫、妻の意向に任せるとか、状況判断的な選択は共に10%以下である。

(2) 学生群

子どもが3歳までは家庭で育てるべきと考える学生A群においては、子どもがある年齢に達した時点で再就職したいと考える学生は52.7%にもものぼる。就労に対して結婚した相手任せや状況判断によるとする回答は少なく、自身の強い意向がみられる。子どもが3歳までは家庭でという考えから、子どもの成長を待って就労したい意向が明確である。

共働きを望み、3歳未満からの保育を望む学生B群は、永続的な就労希望が多くみられる(75.0%)。しかし全体数が少ないため(N=12)、詳細な解釈は避ける。

保育学生のほとんどが将来保育者を目指しながらも、永続的な就労を望むものが少ないのは一つの問題といえよう。

学生群で、永続的な就労を望むものが本報告で分析した対象外の有効回答中38名(保育学生20名、一般学生18名)ほどみられる。しかし、いずれもわが子に対し、3歳未満での集団保育ないしは家庭外での保育を望んでいない。

以上のように学生群は全般に3歳未満の子どもを集団保育に委託して就労することに消極的である。学生A群では子育て期間終了後の就労意向が強くみられ、父母A群で多くみられた不明や相手任せの判断は少ない。

2. 入園時期の選択(表2)

何歳から幼稚園・保育所に入園したかを問う。家庭外の集団保育開始の時期である。

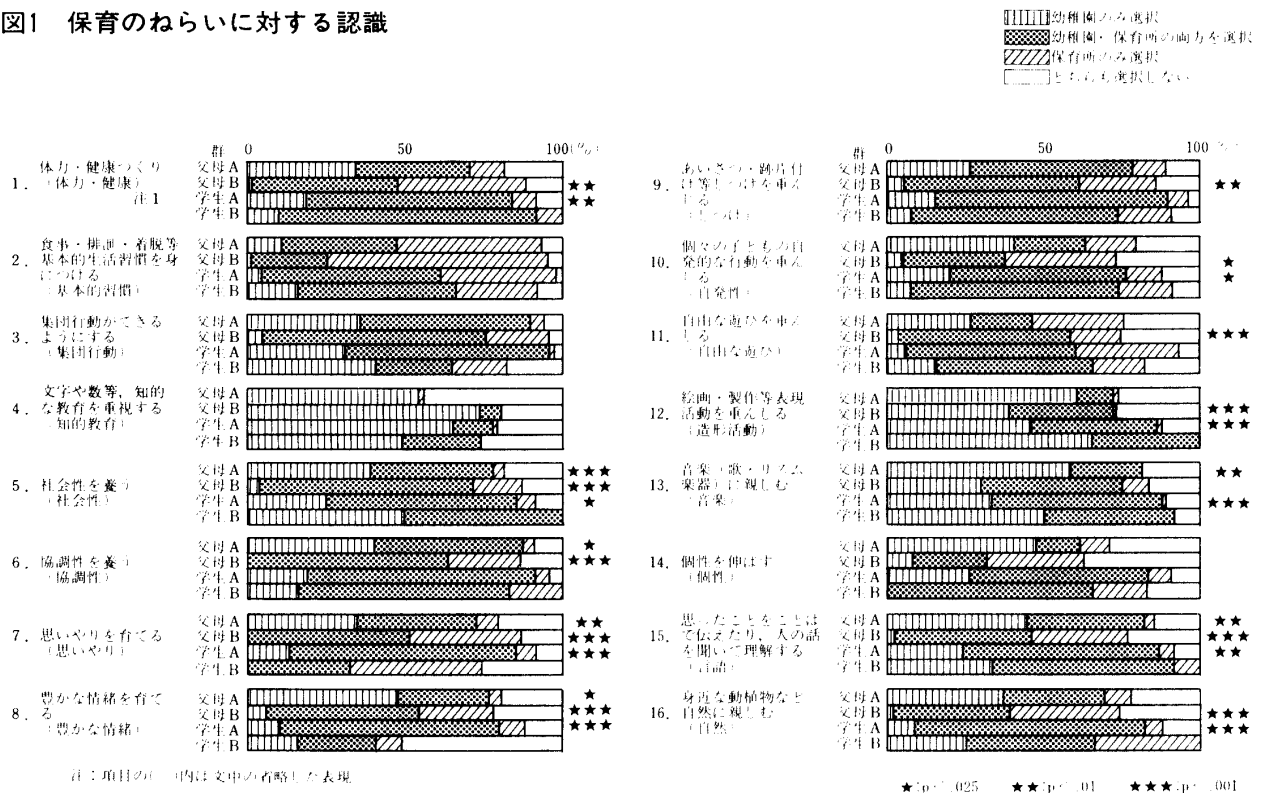
(1) 父母群

群別分類のとおり、父母A群は3歳以降に、父母B群は3歳未満での入園である。特に父母

表2 入園時期 (%)

時期	群		学 生	
	父母A群	父母B群	学生A群	学生B群
1. 産休明け		19.0		16.7
2. 生後3ヵ月		4.8		16.7
3. " 6ヵ月		9.5		0
4. " 8ヵ月		3.6		8.3
5. 1 歳		38.1		41.7
6. 2 歳		22.6		8.3
7. 3 歳	8.4		36.6	
8. 4 歳	87.4		59.8	
9. 5 歳	4.2		2.8	
回 答 な し	0		0.8	8.3

図1 保育のねらいに対する認識



B群は1歳までの入園が80%近くを占めており、いずれも長期間にわたる保育経験とみられる。父母A群は4歳児入園が87.4%と最も高く、このことは3歳児保育を実施していない園が調査対象中多くみられたこととも関係する。

(2) 学生群

子どもが3歳までは家庭で母親が育てることを望む学生A群は3歳児入園を36.6%、4歳児入園を59.8%が希望する。

共働きを希望する学生B群は41.7%が1歳児での入園を希望する。1歳未満での入園希望は合計90%以上にもものぼり、早期からの入園希望とみられる。

父母A群と学生A群の群間比較では、学生群の方が3歳で入園を希望する率が高いことがみられる ($p < .001$)。現実的には全ての幼稚園で3歳児保育を実践しているわけではないため、父母A群が3歳児入園を望んでも入園できない場合もあったとみられる。即ち、父母A群と学生A群間で学生のほうがより高く3歳入園を望むとは言い切れない。

父母B群と学生B群の比較では、学生B群の方が1歳児までの入園時期の選択率が高いが、有意な差はみられない。父母群とほぼ同様の傾向にある。

3. 保育のねらいに対する認識の差異(図1)

3歳までは家庭でという考えをもつ者と共働き等による3歳以前からの保育を選択する者とは保育に対する認識にどのような差異がみられるであろうか。

(1) 父母群

父母A群では保育のねらいとする16項目中(以下項目は省略した表現を使用、各項目にアンダーラインで示す)、自由な遊び、基本的な生活習慣を除く14項目は保育所より幼稚園に重点のおかれたねらいとして、より高く選択している。特に知的教育に関しては保育所のみ重点のおかれたねらいとして認めた父母は1.4%と極端に少ない。父母A群で幼稚園あるいは保育所のねらいとして選択に有意差を示した項目(以下群内での検定で有意差を示すものは図1中に★印)

は社会性、協調性、思いやり、豊かな情緒といった情緒性に関わる項目と音楽、言語の6項目で、いずれも幼稚園にのみ重点をおいたねらいと捉えている父母が高率で見られる。

父母B群では父母A群と比し、体力・健康、社会性、協調性、思いやり、豊かな情緒、しつけ、自由な遊び、音楽、言語、自然を幼稚園、保育所のどちらにも重点のおかれたねらいとしている割合が高い。父母B群はその全員が保育所父母であり、保育所が単に子どもを預かる所ではなく、幼稚園同様に保育を目的とする機関であることを認識していることが示唆される。さらに父母B群では、A群で有意差のみられた情緒性に関わる項目と、体力・健康、しつけ、自発性、自由な遊び、言語、自然は保育所に、造形活動は幼稚園により重点のおかれたねらいとして有意に高く選択された。父母B群は幼稚園の保育内容を認めながら、幼稚園より保育所に、より多面的な保育のねらいを認めている。

父母A群、父母B群間の保育のねらいの捉え方を比較すると全項目で有意差がみられる。即ち、体力・健康、社会性、協調性、思いやり、豊かな情緒、しつけ、自発性、個性、言語、自然の10項目について、父母A群は幼稚園に、父母B群は保育所により重点をおいているねらいとして捉えている（いずれも $p<.0001$ ）。造形活動、音楽は父母A群のほうが父母B群より幼稚園に重点のおかれたねらいとして捉えている（造形活動は $p<.01$ 、音楽は $p<.001$ ）。

本報告と同資料を用いた筆者及び杉本・中村の共同研究では、幼稚園・保育所父母を各所属別に保育のねらいがどのように捉えられているかを検討した⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹⁴⁾。その結果、幼稚園の父母は幼稚園に、保育所の父母は保育所に対し、より積極的にねらいを認めていることが示され、それぞれを幼稚園積極的肯定傾向、保育所積極的肯定傾向とした。このことは自分の状況を肯定的に受け止めていると考えることもできる一方、自分に関わりの無い保育機関に対しては、低い認識になったり、否定的な見方になりがち

なことが考えられる。

本報告で得られた父母の傾向は、各所属保育機関に対する積極的な評価に加え、更に父母の志向性に基づく選択についても同様の傾向を示すことを明らかにしたといえよう。また、3歳未満から保育を受けている父母B群が保育所の保育内容を他機関よりも積極的に認識しているところは注目出来る捉え方である。

(2) 学生群

学生A群の幼稚園・保育所間の捉え方を比較すると、体力・健康、社会性、思いやり、豊かな情緒、自発性、造形活動、音楽、言語、自然の各項目を幼稚園により重点のおかれた保育のねらいとして有意に高く選択している。また基本的生活習慣、自由な遊びは保育園のみに重点のおかれたねらいとして高い選択率がみられる。

学生B群は数量が少ないため、断定は避けるが、幼稚園・保育所間の比較では集団行動、知的教育、造形活動、音楽の各項目は幼稚園により高く選択され、その他の項目は幼稚園、保育所のどちらにも重点がおかれているものとみている。知的教育、社会性、造形活動、音楽に対しては保育所のみ選択は全くみられない。しかしいずれも有意差はみられない。

学生A群、学生B群間での比較は、集団行動、思いやり、豊かな情緒、自然に有意差がみられる（いずれも $p<.001$ ）。学生A群は幼稚園にも保育所にも共通して重点がおかれているものとして捉えている。学生B群は思いやりは保育所により重点のおかれたねらいとし、その他は幼稚園により高い選択をしている。

(3) 父母群・学生群間にみられる差異

父母A群と学生A群間比較では、集団行動以外の全ての項目に有意差がみられる。学生A群は父母A群より幼稚園・保育所の双方に重点のおかれたねらいとして認める率が高い。

父母A群と学生B群間比較では、体力・健康、

知的教育, 思いやり, 自発性, 個性の5項目に有意差がみられる。父母A群は幼稚園に有意に高く選択し、学生B群は幼稚園にも保育所にも両方に重点のおかれたねらいとして捉える率が高い。

父母B群と学生A群間では体力・健康, 基本的習慣, 集団行動, 社会性, 協調性, 思いやり, 豊かな情緒, しつけ, 自発性, 自由な遊び, 造形活動, 音楽, 個性, 言語, 自然の15項目に有意差がみられた。学生A群が父母B群より幼稚園により重点のおかれたねらいとして認めている (しつけ, 社会性では $p<.01$, その他の項目は $p<.001$)。学生A群は各ねらいを幼稚園・保育所に共通したねらいとしながらも、父母B群との比較においては幼稚園により高く認めているのである。

父母B群と学生B群間では集団行動, 思いやり, 豊かな情緒, 自然に差がみられた (いずれも $p<.001$)。学生B群は思いやりに関してより保育所に重点のおかれたねらいとして認め、集団行動, 自然は幼稚園に重点がおかれているとみている。父母B群は豊かな情緒を保育所により重点のおかれたねらいとして捉える傾向がある。

以上より3歳までは子どもは家庭で育てるべきであるとする父母A群は、幼稚園の保育に対しより多面的な保育内容を認めている。やはり3歳までは子どもは家庭でと考える学生A群は、幼稚園・保育所ともに保育機関であることを認めながら、幼稚園に対するねらいと保育所に対するねらいと重点のおかれ方に差をみている。そして幼稚園により多面的なねらいを認めている。

3歳未満から子どもを保育所に入園させている父母B群では、保育所は幼稚園より多面的なねらいに重点がおかれていると認識している。幼稚園に対しては造形活動等の一斉保育的なねらいに重点がおかれていると捉えている。

IV. まとめ

以上、3歳までは家庭保育でという考えを中心に、その考えを持ち、3歳以降に集団保育を選択した群(A群)と就労等により3歳以前からの入園を選択している群(B群)に分け、その母親の就労希望、入園時期、保育内容の捉え方との関連を検討してきた。対象は幼稚園・保育所の父母と一般学生と保育学生である。3歳までは子どもは家庭でという考えは、母親の就労希望、および子どもの集団保育開始の時期と密接な関連を持つことがみられた。

父母A群はわが子を4歳児で入園させる割合が高い。母親自身の就労希望は再就職を望む母親は全体の4分の1で、将来の状況に任せた判断を示す選択が他群に比べ最も高い。幼稚園に対し保育所より多様なねらいを積極的に認めている。

父母B群は保育のねらいを幼稚園独自のものを認めながらも、幼稚園より保育所に対して肯定的、積極的な評価を示す。母親は永続的な就労を望み、子どもは1歳以前からの長期間にわたる保育経験が最も多くみられる。

学生A群は3歳までは家庭でという考えが、就労の一時中断、3歳からの入園希望に明確に表れている。保育のねらいは幼稚園・保育所に共通するねらいとして捉えながらも、幼稚園はより多くのねらいに重点がおかれているとみている。

学生B群は該当者が少なく、調査対象とした学生群は女性の永続的な就労に加え、3歳未満児の家庭外保育に消極的な傾向であることを示唆される。保育のねらいとしては学習的な活動に対しては幼稚園により高い選択がみられる。

就学前のわが子に対し、多くの親は子どもの保育機関として幼稚園か保育所かの選択をする。その選択の背景には母親の就労に対する志向性、子育てに対する考え方があるとみられる。そして人が幼稚園・保育所をどのように捉えているかという認識も選択に関わってくると

考えられる。先に述べたように筆者らの共同研究では幼稚園、保育所に対し、立場を異にする人々がいかなる認識を持つか様々な角度からの検討を進めている。それらによると、先述した幼稚園・保育所の保育のねらいに加え、存在意義、イメージに関しても、幼稚園に対する捉え方は保育所に対するそれよりもより肯定的、積極的な評価であることが明らかにされた⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾。しかし、わが子を保育所に通園させる父母は保育所に対してより積極的・肯定的な見方を持つことも同時に示されている。このような保育機関に対する受けとめ方の差異がどのような要因に基づくものであるのか、更に被保育経験という視点からの分析も重ねた⁽¹¹⁾⁽¹⁶⁾。

その結果、学生群では幼稚園経験者は幼稚園を保育所経験者は保育所をより積極的に認めている。自分の幼児期の経験が反映された結果を持つことがみられる。しかし現在わが子を通じて保育機関に接している母親では、幼児期の被保育経験による一貫した傾向はみられず、現在の経験を反映しているという結果を得ている。

また、幼稚園・保育園は歴史的には異なる成立事情を持つことも両者に対する認識の差異をもたらしていると考えられる。即ち、幼稚園は明治5年の学制の施行と共に幼稚小学として規定され、保育所は明治後期に婦人労働力の確保、及び救貧対策のための託児施設として登場した。幼稚園・保育所は共に保育を目的とする機関でありながら、戦後の教育改革でも一元化されず現在に至っている。そのような歴史的経緯をもちながらも、両者に対する制度上の知識(幼稚園・保育所の設置目的、監督官庁、対象児等)はきわめて乏しいことが明らかにされた⁽¹²⁾⁽¹³⁾。しかしそれに関わらず両者は異なるイメージを持たれ、幼稚園の方により華やかなイメージを持たれていることが示された⁽¹⁵⁾。

現在においても保育所は保育に欠ける児童を措置基準としていることから、保育所は託児

的な、単に子供を預かる施設として受け止められがちなのではないか。上記一連の共同研究及び本報告の3歳未満からわが子を集団保育に委託している父母の保育所に対する捉え方から、何よりも直接保育機関に接することが保育機関に対する正しい認識に通じるといえよう。

本報告においては、3歳までは保育機関に委ねず母親の手で育てるという考えの基に子育てをし、3歳以降集団保育を受けた群は、幼稚園に対してより積極的な評価をなしている。しかし一方3歳以前より集団保育を受けている群は保育所に対してより積極的な評価を持っている。

各々の志向性、育児の姿勢に基づく判断による保育機関の選択を通じて通園する保育機関に対して積極的な評価をなしているといえる。いずれの機関に対しても父母は満足 of いく保育内容を認め、しかもごく早期からの家庭外保育を経験した父母にとっても満足 of いく保育内容であったことが示されたといえよう。日常保育機関に対する直接的な接触の無い学生は3歳未満の保育に対して消極的であったが、そのうち保育を学ぶ保育学生が大半を占めることは問題といえよう。

就学前の子どもを持つ女性にとり、職業選択や就労の時期は多様な状況によるとみられる。しかし、3歳までは子どもは母親が育てるべきであるという考えにとらわれ、早期の家庭外保育を全く否定するのではなく、保育機関に対する十分な認識を持つことにより、より納得のいく選択が出来るのではないであろうか。

本稿では子どもは3歳までは家庭で母親が育てるべきであるという考えを母親の就労に対する志向性、入園時期の選択(家庭外保育の開始時期)、幼稚園・保育所に対する保育内容の捉え方から検討を行ったが、今後は更にわが子を早期から家庭外保育に委ねた父母の経験の質的分析を試みたい。

付記：本報告作成に当たり調査にご協力いた

だいた多数の幼稚園・保育所の父母、先生、学生諸氏に厚くお礼を申し上げます。また、調査を共に行った和泉短期大学助教授の中村美津子さん、帝京大学講師の杉本真理子さんには細部にわたってご助言をいただきました。深く感謝申し上げます。

引用文献

- (1) 平井信義「家庭保育と集団保育」『保育学読本』日本評論社、1982、140-143
- (2) 大久保稔「3歳未満児保育」『現代子ども大百科』中央法規出版、1988、1033-1036
- (3) 網野武博「母親の就労と保育システムの多様化」『児童心理増刊号第41巻第16号』1987、22-31
- (4) 杉山明子「日本における働く母親の実態」『働く母親の時代』NHKブックス、1984
- (5) 藤崎真知代「保育者の保育経験と保育観に関する研究Ⅰ」『発達研究 Vol. 1』1985、23-35
- (6) 山羽小百合・藤井資子「保育に対する意識調査」『日本保育学会第35回大会発表論文集』1982、428-429
- (7) 中地万里子・橋口英俊・後藤嘉余子・川合貞子・高橋裕子「保育者の保育意識に関する研究」『東京家政大学研究紀要第22集』1982、69-78
- (8) 布施佐代子「乳児の社会的相互作用の研究動向—とくに仲間関係の発達の個人差を中心として—」『教育心理学研究』1984、329-339
- (9) 田中祐子・藤崎真知代「育児の社会化」『新しい子ども学第2巻』海鳴社、1986、127-201
- (10) 小林登「新生児の能力と母と子の絆」『親と子の絆』創元社、1986、123-138
- (11) 杉本真理子・中村美津子・上野礼子「幼稚園・保育所の独自性と共通性に対する認識の研究」『保育学年報1988年版』フレーベル社、26-40
- (12) 杉本真理子・中村美津子・上野礼子「幼稚園・保育所の独自性と共通性に対する認識の研究」『日本保育学会第40回大会発表論文集』1987、56-57
- (13) 上野礼子・中村美津子・杉本真理子「幼稚園・保育所の独自性と共通性に対する認識の研究その2」『日本保育学会第41回大会発表論文集』1988、529-530
- (14) 杉本真理子・中村美津子・上野礼子「幼稚園・保育所の独自性と共通性に対する認識の研究その3」『日本保育学会第41回大会発表論文集』1988、530-531
- (15) 杉本真理子・中村美津子・上野礼子「幼稚園・保育所に対するイメージ形成要因の検討Ⅰ」『日本教育心理学会第30回大会発表論文集』1988、520-521
- (16) 中村美津子・杉本真理子・上野礼子「同Ⅱ」『同上』1988、522-523